

# 阿佐井野宗瑞と『医書大全』の出版

久保尾俊郎

阿佐井野宗瑞は大永八年（一五二八）七月に明の熊宗立（均）の『新編名方類証医書大全』二四卷一〇冊の復刻出版を行った。それは吾が国における最初の医学書の出版としてその意義が評価されている。<sup>1)</sup>阿佐井野氏による出版はこれだけではなく、天文二年（一五三三）に『論語』一〇卷二冊、宗瑞の一族と思われる宗禎が同時代に、明応三年（一四九四）刊の『唐賢三体詩』三卷三冊を復刊している。

宗瑞の経歴についてはよくわかつているとは言えない。

室町後期の医者、和泉国堺生まれ。屋号は野遠屋、婦人病の治療にすぐれ、阿佐井野婦人科と称された。享禄元（大永八）年（一五二八）明の熊均の医書大全を翻刻し、日本最初の医書を刊行した。<sup>2)</sup>

といった記述をされていることが多い。そのうち泉州堺の野遠屋の一族であったことは、宗瑞と親しかった著名な医家竹田定祐（一四六〇—一五二八）の『月海雜録』の記事<sup>3)</sup>によって、また『医書大全』を刊行した経緯については建仁寺一華院の月舟寿桂（二四六〇—一五三三）が書いた阿佐井野版『医書大全』巻末の「刊語」によって明らかである。それには、

我邦以儒釋書、鏤板者往々有焉。然未嘗及醫方。惠民之澤、入皆一則鮮。近世医書大全自大明一来。固医家至

寶也。所<sub>レ</sub>憾其本稍少。欲<sub>レ</sub>見而未<sub>レ</sub>見者多矣。泉南阿佐井野宗瑞捨財刊行。彼明本有三寫之謬<sub>一</sub>。令<sub>レ</sub>就<sub>二</sub>諸家考本<sub>一</sub>方以正。斤兩雖<sub>二</sub>一毫髮<sub>一</sub>私不<sub>二</sub>增損<sub>一</sub>。蓋宗瑞之志不<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>利而在<sub>三</sub>救濟<sub>二</sub>天下人<sub>一</sub>。倅哉陰德之報永及<sub>三</sub>子孫<sub>一</sub>。

とある。吾が国では医書は儒書の注釈書とちがつて今まで出版されたことはなかったが、近頃明から輸入された『医書大全』を、泉南堺の阿佐井野宗瑞が財産をなげうって、明本の伝写による誤謬を諸家の本で正したうえで、出版したというのである。

この月舟寿桂の「刊語」は出版にいたるまでの多くの要因を指摘している。

- ・『医書大全』は医者之宝といつてよく、医書として価値があった
- ・希望者が見ることが出来ないくらい本の数が少なく、一度に多くの本を世に出す必要性があった
- ・宗瑞は医方を広めて「救済<sub>二</sub>天下人<sub>一</sub>」の志をもった人物であった
- ・『医書大全』を個人で「捨財刊行」した宗瑞にはその財力があつたとしたことである。

そこで阿佐井野宗瑞という人物についてまず考察を加えてみたい。

宗瑞の人物を知るのにいちばん確実な資料の一つは、堺南宗寺初代・二代住持の語録を集めた武野宗朝編『泉州龍山二師遺稿』二巻である。南宗寺は京都大徳寺の古嶽宗且が大永六年（一五二六）堺南庄軸松に南宗庵を設け、住民の帰依を受けたのに始まる。古嶽の嗣継大林宗套（天文五年出世）が弘治三年（一五五七）三好長慶の外護によって、古嶽の建てた南宗庵を南宗寺と改め、人々の尊敬をうけた。

その南宗寺初代大林宗套の「宗瑞居士十二年忌拈香法語」と「偈」には「氏曰阿佐井野。泉堺豪族。」とあり「天文

十三年龍集甲辰夏五月十七日。伏<sub>レ</sub>迎先考雪庭宗瑞居士十三白之忌辰<sub>一</sub>。喜捨<sub>二</sub>淨財<sub>一</sub>供佛施僧<sub>二</sub>とある。天文一三年(一五四四)に子孫が阿佐井野宗瑞の二三回忌を行つており、宗瑞は天文元年(一五三二)五月に没したことがわかる。『医書大全』出版のほぼ四年後である。また宗瑞は雪庭と号し、堺の豪族と呼ばれている。

続いて「宗瑞居士交衆有道。省<sub>レ</sub>吾無私。嗜<sub>二</sub>文字<sub>一</sub>慕<sub>二</sub>車胤孫康<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>惜<sub>二</sub>寸管<sub>一</sub>。好<sub>二</sub>醫術<sub>一</sub>學<sub>二</sub>倉公扁鵲<sub>一</sub>。要飲上池。頭頭契<sub>レ</sub>轍。歩歩中<sub>レ</sub>規。」とある。宗瑞は人との付き合いに謙虚私なく、学問を好み、中国の晋の時代に、夏は螢光、冬は雪光で勉強して苦学した車胤・孫康を慕つた。特に医学に関心深く、支那古代の名医とうたわれた倉公と扁鵲を学んだ。『史記』の「扁鵲倉公列伝」によると、扁鵲は若いころから医学を習い、後に長桑君と称する老人から秘伝の医書をもらつた。さらに神薬をさずけられてこれを上池の水で飲むこと三十日に及んで不思議な靈感を得るに至り、それによつて靈妙な医術を行つたという。宗瑞だけではなく当時の医学を志す人達はこの二人のことを学んだり影響を受けている。月舟寿桂には『史記抄』があり、「扁鵲倉公伝」に及んでいる。また足利学校の七世九華(一五〇〇—七八)には『扁鵲倉公列伝』がある。後小松帝(一三七七—一四三三)に仕えた医師を出した坂上池院という家系があつた。これは上池の水を飲むことによつて医術を身につけた扁鵲にちなんだ名称である。

さらに「宗瑞居士十二年忌拈香法語」には「久稱<sub>二</sub>泉南英豪<sub>一</sub>。累世能振<sub>二</sub>權勢<sub>一</sub>屢見<sub>二</sub>濟北宗匠<sub>一</sub>。隨處直辨機宜。可<sub>レ</sub>謂蘇軾前世戒和尚何妨。」とある。阿佐井野氏は何代にもわたつて泉南で權勢があり、宗瑞もその一員であつた。「濟北」とは臨濟宗の寺を指すと思われ、その禅僧とのしばしばの会見で随所に意を得たことを述べたという。前世が禅宗の五祖師戒といわれる宋の蘇軾に譬えられているが、詩人蘇軾は我が国中世の禅林においては、参禅者としても名高かつた。要するに宗瑞は禅宗にもつうじた知識人として評価されているのである。

そして「生死去来。遊戯三昧。閱<sub>二</sub>六十年<sub>一</sub>於黃梁半炊<sub>一</sub>。豈墮<sub>二</sub>小知小見<sub>一</sub>。」「兒孫盛大有<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>斯」とある。年齢は六

○、子孫は天文一三年の時点で勢力が盛んであったことを語っている。宗瑞は文明五年（一四七三）生まれと考えられ、『医書大全』刊行の大永八年（二五二八）には五六歳であった。

以上が南宗寺初代大林宗套が描く阿佐井野宗瑞像である。なお大林宗套は永禄一一年（二五六八）一月に八九歳で没しているから、宗瑞より二七歳年下で、宗瑞が死んだ天文元年（一五三三）には三三歳であった。南宗寺（南宗庵）の有力な檀家であった阿佐井野氏の代表者阿佐井野宗瑞の生前の姿を、大林宗套は目の当たりにしていたと考えられる。

『泉州龍山二師遺稿』に次いで阿佐井野宗瑞についての信頼できる資料として、竹田定祐極楽院の『月海雜録』がある。定祐ははじめ秀慶と号し、後、極楽院月海と称した。定祐のことを禁裏の女官の当番日記である『おゆどのの上の日記』では「くらくいん」「くらく寺」と記し、しばしば定祐は禁裏の診脈に伺候している。そして『実隆公記』の大永八（享禄元）年（二五二八）八月九日に定祐が八月八日に六九歳で死亡したことが記されている。内大臣を経験した公家であり、且つ一流の文化人であった三条西実隆は定祐の死を悲しみ、「天下彌無<sup>二</sup>医師<sup>一</sup>と嘆いている。また月舟寿桂は定祐の妻や息子の定桂とごく身近に暮らしたことがあり、定祐没後定桂から父の肖像画に贊を頼まれて、享禄二年（二五二九）八月『竹田月海光照法印肖像』を書いている<sup>10</sup>。定祐は禁裏の人々にも信頼され、京都の公家や学僧とも親しく交流した人物であった。

その竹田定祐の『月海雜録』には、「此葉泉堺野遠屋宗瑞に伝授。有奇効。可秘ト云々」とか「秘葉阿佐井野宗瑞ニ伝授」とある。宗瑞は秘葉を伝授されるほど定祐と親しい間柄であった。宗瑞は野遠屋宗瑞と呼ばれており、堺の豪商野遠屋の一族であったことが知られる。このことは『龍山二師遺稿』で「久稱<sup>二</sup>泉南英豪<sup>一</sup>。累世能振<sup>二</sup>權勢<sup>一</sup>」と呼ばれているのに呼応すると考えられる。

以上のことから阿佐井野宗瑞は野遠屋の一族として豊かであり、竹田定祐から医術を教わったことがわかる。また京都で活躍する定祐を通じて月舟寿桂と親交を持ったことも推察される。

ところで阿佐井野宗瑞が野遠屋の一族であったことは、資金のいる出版という事業を個人で行うことを可能にした最大要因であったと思われる。そこで野遠屋宗瑞としての特徴に言及しておきたい。

野遠屋は康応元年（一三八九）の『開口神社文書』に野遠屋周阿弥の名が見られるのをはじめ、一五・一六世紀の堺に、野遠屋の屋号を持つ人物が少なからずいたことが資料によって確かめられる。しかし阿佐井野氏がどの野遠屋に相当するのかが具体的にはわからない。

そこで野遠屋の一般的性格を指摘する<sup>13</sup>しかなないのだが、豪商野遠屋は、堺から奈良におもむく竹内街道の要地、河内国八上郡の野遠郷出身とされ近郊の商業集落ないし農村と深い関係を持っていた。土倉を営むなど高利貸しとして利益を得るほか、大徳寺松源院の祠堂銭を借入し勘合貿易による輸入唐糸取引で利益を得ていたものもいるとされる<sup>14</sup>。野遠屋は堺の自治組織として著名な会合衆の早くからの一員であった。

だが、野遠屋のような伝統的な地縁共同体を代表する商人に対して、一六世紀の後半頃には津田宗達、宗及や今井宗久など新興の、貿易業に必要な納屋を持つ納屋衆と呼ばれる商人が台頭してきて、経済的な実権は会合衆から納屋衆に移っていった。

堺文化を代表する茶の湯は津田や今井、千利休といった納屋衆が中心であった。『天王寺屋会記』天文一八年（一五四九）二月二日の条で、津田宗達は野遠屋兵庫の茶道具を「せかいわろく候、土も能もなし」と批判している。永祿一一年（一五六八）織田信長が堺に矢銭二万貫を課した時、野遠屋は会合衆の代表として反信長の立場をとったが、

今井宗久等茶人グループの納屋衆は信長に結びつき、堺の有力者の意見はまともなかつた。結局堺は信長に屈している。

先述の如く南宗寺の大林宗套に泉南の英豪と呼ばれた阿佐井野宗瑞は軸松町にあった南宗庵の有力な檀家であつた。同じく軸松町に住んでいた著名な茶人武野紹鷗（一五〇二—一五五）も南宗寺建立の立役者であり、紹鷗の孫の宗朝がまとめた『龍山二師遺稿』にも宗瑞の偈の後に武野紹鷗の「一閑紹鷗居士十七年忌香語」等が収録されている。紹鷗の子宗瓦の弟子が野遠屋を批判した津田宗達であり、宗達の子宗及の女婿が軸松町に在住し織田信長に通じた今井宗久であつた。

してみると宗瑞はこれらの商人・茶人ときわめて近い所にいたはずである。しかも子孫も繁栄していた様子にもかわらず、宗瑞はじめ阿佐井野氏の名は『数奇者名匠集』<sup>16</sup>といった茶人系図や、当時頻繁に開かれていた茶会に参加した人物の名を多数記録している『天王寺屋会記』等の茶会記に、全くその名が登場しない。

このことから宗瑞をはじめとする阿佐井野氏は、野遠屋の一族として、新興の納屋衆の茶人グループとは商人としても肌合いのちがう人々であり、政治家に近づいたり、数奇者の世界に生きるのではなく、仏道や儒学、医学を修め、塾を開いて教育に努める一族<sup>17</sup>であつたと考えられる。

○  
それでは宗瑞は何故『医書大全』を出版することになつたのだろうか。医学は万人にとって必要不可欠なものであり、医書の出版は誰でも歓迎するところとも言えるが、とりわけ『医書大全』がなぜ医書の中で吾が国で初めて阿佐井野宗瑞によつて出版されることになつたのであろうか。

室町時代後期の医学界には、長享三年（一四八七）中国に渡り、明応七年（一四九八）に帰朝して元の李東垣、朱丹

溪の医学を伝えた田代三喜に足利学校で李朱の医学を学んだ曲直瀬道三が広めた一派と、明応年間（一四九二—一五〇一）明国に渡り、漢の張仲景の方傷寒論医説を日本に伝えた坂浄連の医学を広めた永田徳本の傷寒論医学の流れがあった。<sup>(18)</sup>

すなわち、明に渡って学んできた中国からの医学が最も尊重され、影響力を持っていたのである。竹田定祐の先祖昌慶も渡明している。<sup>(19)</sup> 彼らは帰国の際医書を当然持ち帰ってきたが、とりわけ宗瑞の生きた一六世紀の堺は遣明船の発着地として繁栄を誇り、日明貿易によって『医書大全』を始め多くの医学書も輸入されていた。堺の海会寺の季弘大叔の日記『庶件日録』の文明一八年（一四八六）正月八日の条には「飯舟多<sup>20</sup>医書」とあり、『活人心法』（明・仙朱権撰）、『奇効良方』（明・方賢編）、『鍼灸資生経』（宋・王執中撰）、『医方捷徑』（明・王宗顕撰）といった、宋・明版の医学の名が見える。

『庶件日録』は文明一六年（一四八四）四月七日の条に『医書大全』に言及し、六月一五日の条では季弘大叔は『医書大全』について人と語り合っている。阿佐井野宗瑞はその時一二歳であったと思われるが、中国から輸入された最新の医学書を容易に目にし手に入れることが可能な環境にいたといえる。

『医書大全』は熊宗立が正統一二年（一四四六）暮春の自序でいっているように、延祐年間（一三二四—一三二〇）元の孫允賢が『医方集成』を刊行、それに熊彦明が続増して『医方大成』とし、熊宗立が「孫氏未嘗採者與<sup>21</sup>夫家世傳授之秘<sup>22</sup>総彙成<sup>23</sup>編凡二十四卷」として出来たものである。著者熊宗立の人物については、呉高の序にも触れられており、明の医学家で福建建陽の人、医学に精通し、著作が多いといったことが言われている。<sup>(21)</sup> 我が国には永和四年（一三七八）に帰朝した武田昌慶が『医方集成』をもたらし、<sup>(22)</sup> 『医方大成』の名は文明一二年（一四八〇）成立の一条兼良の『尺素往来』に載っている。『医書大全』は先述のごとく文明一六年（一四八四）宗瑞と同郷の堺海会寺の季弘大叔が読

んでいて、それぞれ日本に伝わり識者の知るところとなっていたのである。成化三年（一四六七）刊の『医書大全』は最新の中国からの輸入医学書の一つだったといえる。

『医書大全』は熊宗立の自序に「各卷分門各門折類各類載レ方」「使下人展レ卷提ニ其綱領ニ而節目分明上。治レ病之際審ニ其証候一。而方薬備具。得レ無檢閲之繁」とあるごとく分類がきつちりとなされていてわかりやすく、症状に応じた処方薬を見つけるのに便利な手引書的なものであった。江戸時代に入ってからではあるが、「其集成ヨリ始マリテ後チノ大成大全ニ至マテ皆ナ治療方劑ノ書ニシテ。入門正傳回春等ノ如キ療治本ナリ。然ルニ其ノ医書大全ノ毎門ノ首メニ所記ス病論ハ。医道ノ切要ヲ述ヘテ。尤トモ初學者ノ便タラシムルニ足レリ。」（岡本為竹『医方大成論和語抄』元禄一五年）と言われている。又「大永の頃より医書大全行はれて大成すたる。東井師の抄に当流には大全の論を寫してよむ」（奈須恒徳『本朝医談』文政五年）とあり、江戸時代まで最も勢力のあつた曲直瀬道三（東井師は二代目玄朔（一五四九—一六四三）のこと）の家でも『医書大全』が高く評価されていた。

以上のことから中国医学が尊重された室町後期の医学界で、『医書大全』は最新の中国伝来の医学書の一つであり、その中でも「医道ノ切要ヲ述ヘテ。尤トモ初學者ノ便タラシムル」ものとして、まさしく「医家至宝」（阿佐井野版『医書大全』刊語）に値する特徴を持っていた。多くの医者が求めていた便利で役立つ治療方剤の手引書であり、そこに宗瑞が出版の価値を認めたものと思われる。

次に阿佐井野宗瑞と『医書大全』との関わりはどの様なものであつたかということだが、先に南宗寺の大林宗套が『龍山二師遺稿』で「好「医術」學「倉公扁鵲」と宗瑞を評しているように、宗瑞は医学に興味を持ち学んでいた。彼が医を業としていたかどうかは明確ではないが、『月海雜録』では竹田定祐より薬の秘伝を受けており、「偏癰押薬宗瑞ニ口傳、此美心院殿淡路殿へ傳授、宗瑞淡路殿傳之云々」とあるように、医術を実際に施していたと思われる。『医書

『大全』刊行に際して宗瑞は明版の誤謬を「弁誤」で直しているが、『和剂方』（宋・元時代の薬局方書）、『袖珍方』（明・李恒等撰）、『外科精要』（南宋・陳自明撰）、『拔萃方』（『濟生拔粹方』は元・杜思敬編）によつており、中国の医学書の知識を充分にもつていた。

その宗瑞は出版までに当然『医書大全』について学ぶことが多かったと思われる。

竹田定祐の『月海雜錄』には、「一華和尚とは月舟寿桂のことである。月舟は永正一七年（一五二〇）一〇月より大永四年（一五二四）入事ソ」とある。一華和尚とは月舟寿桂のことである。月舟は永正一七年（一五二〇）一〇月より大永四年（一五二四）六月まで『史記』の講義を建仁寺で行っている（『実隆公記』）。その際かどうかは確定できないが月舟の講義に竹田定祐も出席して扁鵲倉公伝の話聞きそれを定祐が『月海雜錄』に記録していると考えられる。

阿佐井野宗瑞が定祐とともに月舟寿桂の講義に臨席した記録は見出せないが、後述するように、天正一六年（一五四七）の識語を持つ『医書大全講義』<sup>24</sup>の中の『医学源流』についての考証で、月舟寿桂が『医書大全』の誤謬を正したことが記され、その考えがそのまま阿佐井野版『医書大全』に取り入れられていることから、宗瑞は月舟寿桂と直接交流をもち、『医書大全』他の医学の知識の教授を受けていたことが推察される。『龍山二師遺稿』の大林宗套の語「屢見『濟北宗匠』。随處直辨機宜」の「濟北宗匠」とは建仁寺の月舟寿桂のことであり、それには『医書大全』についての活発な話し合いが含まれていたと考えても無理はなからう。こうした交流があったからこそ、月舟は阿佐井野版『医書大全』の巻末に宗瑞の出版姿勢を具体的に記した「刊語」を書いたのだと考えられる。月舟は医学に関する知識も深かったことが指摘されている。<sup>25</sup>

大永八年に阿佐井野宗瑞が堺で刊行した『医書大全』は明の熊宗立の原版をどのような形で復刻したものでらうか。

阿佐井野版『医書大全』の現存諸本は、筆者が実見または目録によって所在を確認したものは、大阪府立図書館二本、武田科学振興財団杏雨書屋六本、天理図書館、龍門文庫、京都大学付属図書館、鶴見大学図書館各一本、宮内庁書陵部二本、国立国会図書館、東京大学総合図書館、岩崎文庫、岩瀬文庫、尊経閣文庫、医学文化館各一本、研医学会眼科図書館二本がある。<sup>(26)</sup>それらは全二十四巻の内容以外に「医学源流」一卷を持つ本と、「医学源流」を欠く本の二通りに分かれる。また零本、合冊本以外は九冊乃至一〇冊本である。

阿佐井野宗瑞の復刻したものがどの様な形態をしていたかということだが、現国立公文書館所蔵の成化三年刊の明版『医書大全』は第一冊目の序の後に「医学源流」を持つ一〇冊本である。また先述の天正一六年成立の『医書大全講義』に熊宗立が景泰元年に「医学源流」を編集し、『医書大全』の「巻首二付タリ」とある。従って、現存阿佐井野版『医書大全』の中には「医学源流」を持たないか、持っても一冊目がないのがあるが、大永八年に阿佐井野宗瑞が復刻した当初の『医書大全』は巻首に「医学源流」を持つ一〇冊本であったと考えられる。

そこで現存の阿佐井野版の諸本の中で、「医学源流」を第一冊目に持ち、明版とほぼ同じ構成、すなわち第一冊(序自序 医学源流)、第二冊(目録)、第三冊(巻一、二、三)、第四冊(巻四、五、六)、第五冊(巻七、八、九)、第六冊(巻十、十一、十二)、第七冊(巻十三、十四、十五)、第八冊(巻十六、十七、十八)、第九冊(巻十九、二十、二十一)、第一〇冊(巻二十二、二十三、二十四、弁誤、刊記)といった構成の、大阪府立図書館蔵本を取り上げ、宗瑞が復刻した明版と比較しながら阿佐井野版の特徴を明らかにしていきたい。但し国立公文書館所蔵の明版『医書大全』の現状は全体に裏打ちが施された改装本であるので、明版の原裝部分との比較に努めた。なお、両本は第一冊首に、呉高の序(天順二年)、熊宗立の自序(正統十一年)、第二冊目録末に「成化三年丁亥熊氏種徳堂刊」の原刊記を持つ。また巻一風門から巻二十四小兒門までの病論・方論の内容は両本とも共通である。<sup>(28)</sup>

両者の違いの特徴的なことは、阿佐井野版が第一〇冊に、明版が持たない「弁誤」と「刊語」各一丁を新たに補刻していることである。

両本の書誌事項の特徴を比較すると、

書誌事項	明版『医書大全』	阿佐井野版『医書大全』
大きさ	二一・九×一三・五センチ	二六・六×二〇・〇センチ
匡郭内	四周双辺 一八・三×一二・二センチ 一三行 二四字 小字双行注 有界 見出陰刻	左右双辺 二一・〇×一四・五センチ 一三行 二四字 同上 同上 同上
題簽 (副題簽)	(後補) 墨書医書大全 序(目録・卷数) (後補) 右上方墨書各卷内容	同上 (後補) 中央墨書各卷内容
序題・ 目録題	新刊名方類証医書大全(第一・二冊)	同上
内題	新編名方類証医書大全(第三冊) 名方類証医書大全(第四冊以下)	同上 同上



こうしてみると、阿佐井野宗瑞の復刻した『医書大全』は明版「医書大全」二四卷一〇冊を形態的にはほぼ忠実に復刻したものといえる。柱心の題を統一していることに、阿佐井野版のより整理された姿を読み取ることができよう。ところで、宗瑞は復刻に当たって単に明版を再版するといった態度ではなく、内容を吟味したうえで批判的に再刻している。それは、阿佐井野版に追加された「弁誤」に「今所刊之書與大明板有<sub>二</sub>斤兩分銖之異<sub>一</sub>。彼板有<sub>下</sub>藥種之下不<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>斤兩者<sub>上</sub>。又有<sub>下</sub>藥種同者竊考<sub>レ</sub>諸方<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>之。若有<sub>下</sub>善本自<sub>二</sub>大明<sub>一</sub>來<sub>上</sub>則復當<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>彼也」とあるごとく、阿佐井野版は明版の藥種やその斤量を「考<sub>二</sub>諸方<sub>一</sub>」してから訂正・追加しているのである。「弁誤」では卷七氣門の姜合丸、去鈴丸、卷十四水腫門の家藏方消腫圓、卷十六脫肛門の釣腸圓、卷十九癰疽門の梔子黃芩湯、卷二十一婦人門の六合湯、卷二十四小兒門の金露圓の斤兩を、宋・元・明版の医学書の説によつて直してある。

しかし兩本を比較してみると、藥種と斤量の訂正・追加は「弁誤」の部分だけではなく全体に渡る。卷之一風門を例にすると、

藥名	明版『医書大全』(藥種・斤量)	阿佐井野版『医書大全』(藥種・斤量)
十一 勻氣散	天台烏菜 (なし)	天台烏菜 三兩
三十四 消風散	羌活 二兩	羌活 一兩
三十八 羌活愈風湯	生地黃 (なし)	生地黃 四兩
五十四 驚氣圓	自僵蚕 (なし)	自僵蚕 半兩

といった具合である。

また卷三十癆瘵門嗽血の二十六黃耆鱉甲散では薬種の順序が、明版は

桑白皮 半夏 地骨皮 知母 黄耆 秦艽 鱉甲 肉桂 人参 白茯苓 紫苑 苦梗 赤芍薬 天門冬 生乾地  
黄 柴胡 甘草

とあるが、阿佐井野版では

桑白皮 半夏 紫苑 甘草 白茯苓 地骨皮 秦艽 黄耆 知母 赤芍薬 肉桂 人参 苦梗 天門冬 鱉甲  
生乾地黄 柴胡

と入れ代わっている。これは阿佐井野版が復刻に際し、例えば「桑白皮 半夏 紫苑 甘草、各二兩半」というように、明版では同じ斤量の薬種をバラバラに記述しているのを、まとめて記していることによると考えられる。

また先にも触れたが、『医書大全講義』に『医学源流』中の唐慎微、掌禹錫について月舟寿桂が明版の誤りを正したとあるが、阿佐井野版第一冊の「医学源流」のその部分では、「唐慎微、宗立誤テ、三国ノ蜀ノ中へ入タリ」ということで明版にある唐慎微の前につけた「蜀」の文字を削つてある。さらに『医書大全講義』に「掌禹錫、月舟ノ考ヘラレタリ、劉禹錫ハ唐人詩人ソ」とあるが、明版で宋の項目に劉禹錫とあるのを、阿佐井野版は掌禹錫とし、「大明版宋部載劉禹錫。劉唐人也。恐字誤歟。今改劉作掌。蓋掌禹錫宋人也」と付記してある。この事實は阿佐井野宗瑞が、『医書大全』の出版に際して十分に月舟寿桂の意見を考慮し、それを実際に取り入れていることを示していると言えよう。しかも「若有善本自大明一來則復當用彼也」とさらなる訂正を求めている。

宗瑞の復刻した『医書大全』は全五〇八丁、二丁を一枚の版木に刻したとすると、二五四枚になる。個人の事業としては「捨財刊行」（「刊語」という大変なことであった。また内容については「彼明本有三寫之謬」。令就諸家考本一方以正」（「刊語」という形で訂正し、さらに薬種の斤量については「竊考三諸方一改之」（弁誤）という姿勢で正

されている。宗瑞の刊行に際しての態度は、一六世紀の堺の一人人がそれまで誰も行っていない明の医学書を復刻出版することとして、きわめて真摯であつたといえよう。

最後に阿佐井野版『医書大全』のその後について触れておきたい。『医書大全』は『医方集成』、『医方大成』を踏まえてできたものであり、大永八年の『医書大全』出版の以前に『集成』、『大成』共に日本に到来し知識人に知られていたことは先に見た通りである。『医方集成』は目ざましい影響力を持たなかつたようだが、『医方大成』の場合は自らも医術を施したとされる山科言継の『言継卿記』の天文一九年（一五五〇）閏五月三日条にあるごとく、「医方大成論」として、一条邸において吉田桂藏が講演を行っている。元の孫允賢の『南北経験医方大成』一〇巻そのものは『医書大全』のように我が国で復刻されなかつたが、薬方を除いた病論の七二門を集めた『医方大成論』は、古活字本に小瀬甫庵の文禄五年（一五九六）刊本以下数種あり、江戸時代には多くの版本が刊行され医家の間に流行した。但しこの『医方大成論』は元版の『医方大成』の病論そのものを抜き書きしたのではなく、並べ方を変え、『医書大全』の論を補っている。また『医書大全』の病論のみを集めた『医書大全論』の古活字版も刊行されている。<sup>30</sup>

しかし『医書大全』は阿佐井野宗瑞によつて出版されたことによつて「大永の頃より医書大前行われて大成すたる」（奈須恒徳『本朝医談』）と言われるぐらい、『医方大成』を上回る影響力を持った。また江戸時代まで大きな勢力のあつた道三流の曲直瀬玄朔が天正七年（一五七九）二月の『医方大成論釈談』<sup>32</sup>で「大成ヨリモ大全ハ精キゾ、大成ニハ婦人門小児門ト斗アルニ、大全ハ大成ヨリコマカニ大成无キ事ヲ加ル」と『医方大成』よりも『医書大全』を評価し、「大成論ニナキノ大全ノ論ヲモ書キタル」のが道三流と他流との違いだと言っているように、『医書大全』は有力な医者に利用された。

事実、阿佐井野版『医書大全』の大阪府立図書館蔵本には「天正十二年秋八月十五日薬院使全宗得之 翠竹道三(花押)」という識語が巻末にあり、曲直瀬道三(一五〇七—九四)が阿佐井野版を所持していたことになる。又国立公文書館所蔵の明版『医書大全』は「江戸医学蔵書之記」「多紀氏蔵書印」の印記を持ち、この本が江戸幕府医官多紀氏の旧蔵であることがわかるが、これには阿佐井野版の「弁誤」の部分書き加えられている。『本朝医談』の著者幕府医官奈須恒徳も龍門文庫所蔵本の所持者であった。東大本と書陵部本の一本も多紀氏、杏雨書屋本の一本は曲直瀬道三(玄朔)旧蔵になることがそれぞれの印記によって知られる。江戸時代の有力な医者も多くが阿佐井野版『医書大全』を利用していた様子が伺えよう。

このように需要が多くあつた故からか、阿佐井野版『医書大全』の版本は江戸中期まで残っていたようで、その頃まで刷本が書肆から売り出されていた。ただ『医学源流』一卷は古活字本が出版されており、江戸時代になって『医書大全』と独立して刊行されている場合がある。

寛文一〇年(一六七〇)から正徳五年(一七一五)にかけての書肆の出版書籍目録に『医書大全』の書名があり、そのほとんどが一〇冊本である。天和元年(一六八一)では一五匁、元禄九・宝永六年(一六九六・一七〇九)では一六匁、正徳五年(一七一五)では二〇匁で売られていたことがわかる。元禄九・宝永六年、正徳五年の書籍目録には『医書大全』一〇冊「中野小左」、『医学源流』一冊「風月」とそれぞれの出版元の名がある。中野小左衛門は真言書、風月庄左衛門は儒書・医書の出版元としてよく知られた京都の出版書肆であった。<sup>(34)</sup>阿佐井野版『医書大全』は江戸時代中期まで便利な医学書として出版されていたといえよう。

以上我が国で初めて医学書『医書大全』を復刻出版した阿佐井野宗瑞の人物とその出版との関係をめぐる幾つかの

項目について論じてきたが、以下簡単にまとめてみたい。

宗瑞は文明五年（一四七三）に生まれ、一六世紀前半の繁栄を誇る堺に生き、天文元年（二五三二）五月に没した人物であった。地縁的共同体の中で財力を蓄えた野遠屋の一族であり、学問、特に医学に関心を持ち、その熱心さは京都の当時一流の知識を持っていた建仁寺月舟寿桂の教えを乞うに至った。吾が国では中国医学が尊重されていたが、日明貿易で多くの医書が輸入されていた堺在住の宗瑞は、医方を広めて人々を救う志を持って、明からの最新の輸入書の一つであり、治療方剤の手引書として最も便利であった『医書大全』を捨財刊行することになった。

総じて阿佐井野版『医書大全』は明版の原本を形態的にはほぼ忠実に復刻している。全五〇八丁、二丁を一枚の版木に刻したとすると、二五四枚になる。また内容については月舟寿桂の意見を入れて改め、特に薬種の斤量については「竊考三諸方改之」という姿勢で正し、さらなる善本での訂正を求めている（「弁誤」）。宗瑞の『医書大全』出版に際しての態度は、一六世紀泉南堺の一人人がそれまで誰も行っていない明からの輸入医学書を復刻出版することとして、りっぱなものであったといえる。阿佐井野宗瑞の刊行した『医書大全』は曲直瀬道三等医学界の大物にも重宝がられ、二百年近く後の江戸時代中期まで出版されていた。

### 注

- (1) 例えば山岸徳平『書誌学序説』、一九七七年、一八一頁
- (2) 三省堂編修所編『コンサイス人名辞典日本編』、一九八六年、一七頁
- (3) 東京国立博物館所蔵天保三年写本による。
- (4) 澤庵和尚全集刊行会編『澤庵和尚全集』巻六、昭和二年、九―一二頁

- (5) 足利学校遺蹟図書館所蔵写本
- (6) 詳細な月舟寿桂の註が入った宗版『史記』（国立歴史民族博物館所蔵）も現存する。
- (7) 足利学校遺蹟図書館所蔵自筆本
- (8) 禅学大辞典編纂所編『新版禅学大辞典』、一九九一年、三七八頁。济北の項に臨濟義玄の異称とある。
- (9) 朝倉尚『禅林の文学』、昭和六〇年、四五七頁
- (10) 東京大学史料編纂所所蔵写本『竹田月海光照法印像贊等抄録』による。
- (11) 定祐の兄円俊高定は、明応元年（一四九二）に堺に住んでいた。後柏原帝から薬師院の号を賜り、堺に定住。その嗣円瑞定信は豊臣秀吉より一千石を給せられ、文禄三年一二月に法印となって船松に屋敷地を与えられた（泉州堺医学竹田薬師院由緒書『堺市史』第四卷所収）
- また文禄二年、宗瑞の子孫にあたると思われる阿佐井野承瑞（阿佐井野氏十三代）は『薬性草木名鑑』二卷（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）という本草書を完成している。
- 寛永二年に亡くなった薬師院石林円玖は「其族阿佐井野」「即大醫竹田薬師院主也」（『明暗雙雙集』第一卷『澤庵和尚全集』卷七所収）と言われており、江戸時代初期には竹田と阿佐井野は親戚関係になっている。
- (12) 堺市役所編『堺市史』第四卷資料編第一、昭和五年、四六一頁
- (13) 豊田武「堺」（『豊田武著作集』第四卷、昭和五八年、所収）による。
- (14) 佐々木銀弥『日本中世の流通と対外関係』、平成六年、六九—七〇頁
- (15) 『天王寺屋会記』六、一九八九年、一三三頁
- (16) 注(12)と同書、三三四頁
- (17) 阿佐井野版『唐賢三体詩』の刊語に、「此板流伝自京至泉南於是阿佐井野宗禎購以置之於家塾也」とある。
- (18) 富士川游『日本医学史』、昭和二六年、一四七頁
- (19) 竹田昭慶『文明口訣』（三木栄『室町時代の堺の医事』『和泉志』一九号、一九五九年、に紹介されている）
- (20) 三木栄『体系・世界医学史』第四部、昭和四七年、一七、一三三頁

- (21) 吳海林・李延沛編『中国歴史人物辞典』、一九八三、五〇六頁。熊宗立の著作として、『脈訣図要俗解』六卷、『傷寒運氣全書』一〇卷、『外科精要付遺』三卷、『婦人良方補遺大全醫藏目錄』二四卷、『類證錢氏小兒直訣』一〇卷、『素問運氣圖括定局立成』一卷等がある(陳邦賢『支那医学史』、昭和十五年、二一八―二二五頁)。日本に伝わり出版されたのは、『医書大全』が最初であるが、天文五年(一五三六)入明の谷野一柏が明刊本『八十一難経』三卷を越前で復刊している。
- (22) 注(19)と同書による。
- (23) 注(20)と同書、一七、一八、二三頁
- (24) 無窮会神習文庫所蔵写本
- (25) 今泉淑夫『東語西話』、平成六年、二四三頁
- (26) 小曾戸洋『名方類証医書大全』解題(北里研究所附属東洋医学研究所編『和刻漢籍医書集成』第七編、一九八九年、所収)では二七点を紹介。
- (27) 『大阪府立図書館蔵稀書解題目録和漢書の部』、昭和三八年、九八頁に解題有り。
- (28) 但し、『医書大全』の初版は熊宗立序にある正統十一年(一四四六)、再刻本が吳高序にある天順二年(一四五八)に出版されたといわれる(注(26)小曾戸論文)
- (29) 小曾戸洋『医方大成論』解題(北里研究所附属東洋医学研究所編『和刻漢籍医書集成』第七編、一九八九年、所収)に三三点を紹介。
- (30) 静嘉堂文庫所蔵『南北経験医方大成』、早稲田大学図書館所蔵貞享五年刊『医方大成論』、大阪府立図書館所蔵『医書大全』を比較すると、『医方大成論』には『医方大成』の卷八から十に相当する部分に病論の順序の入替えがあり、卷九婦人論、卷十小児論の所に、『医書大全』からの病論を加えてある。
- (31) 川瀬一馬『古活字版の研究』上巻、昭和四二年、三三六頁、同書中巻、同年、七五八頁
- (32) 京都大学文学科図書室所蔵明治四三年写本
- (33) 慶応義塾大学付属研究所斯道文庫編『江戸時代出版書籍目録集成』四冊、昭和三七―三九年、所収

(34) 井上隆明 『近世書林版元総覧』、昭和五六年、四二四、五〇九頁

(小論作成にあたっては多くの図書館施設を利用させていただきましたが、とりわけ、足利学校遺蹟図書館、医学文化館、大阪府立図書館、京都大学文学科図書室、研医学会眼科図書館、国立公文書館、国立国会図書館、静嘉堂文庫、武田科学振興財団杏雨書屋、東京国立博物館、東京大学史料編纂所、無窮会神習文庫のお世話になりました。感謝いたします。)

(くぼお としろう 特別資料担当)